

リレー随筆

植物検疫の現場から(1)

空港検疫の昨今

東雲のかなたから銀翼を輝かせダッシュ400がゆつたりと降りてくる。着地、そしてターミナル前を走り過ぎ後を追うように轟音が伝わってくる。午前6時00分成田空港の一日の始まりだ。

国際線一日の発着回数320回(世界第11位)、旅客数5万9千人(同5位)、国際貨物扱量3,800トン(同1位)を扱い、また40か国96都市と結ばれる文字どおり日本の空の表玄関である。

空港は時代を映す

10年一昔というが、10年ほど前はハワイ帰りの乗客がパインアップル、条件付パパイヤ、アンズリュウムの切花などを汗をかきながら植物検査カウンターに持ってきた。せっかくのお土産も時としてコナカイガラムシ等で不合格となる。このようなときは、一時預かって消毒後に引き取ってもらうが、その時間が取れない方は放棄していった。海外旅行のハワイ人気は今も昔も変わらないが、お土産として植物の持ち込みが減ってきている。重いパインアップルは敬遠され、条件付パパイヤ等が生き残っている程度である。それに変わって台頭してきたのが、タイなどからのランの花たちである。若いカップルからおよそ国内で花を買ったこともないと思われる人までが買ってくる。日本人も花を愛でる心のゆとりが出てきたようだ。

空港は社会を映す

数年前、黄金の国ジバングをめざしイランから米、豆類、ナッツ、乾燥野菜など自らの食糧を持参して連日大勢の人が来日してきた。植物防疫所では、彼ら専用のカウンターを設け防疫官を増員して対応したが、余りにも検査件数が多く検査には2、3時間を要し、深夜12時までかかることがあった。困ったことに、害虫による不合格や輸入禁止品のクルミ、トマト等があったとき彼らに身振り、手振り、片言のペルシャ語を交えて理由を説明してもなかなか通じず納得してもらうのに苦労したものだ。

昨夏、国内の冷害が植物検査カウンターにまで影響が出てくるとは夢にも思わなかった。今年2月、米不足が新聞などで報道されると、数日後には、米がお土産として持ち込まれるようになり、3月に入るとあたかも日本

の米がなくなったかのように米国、タイ、豪州、中国などの多くの国から携行され、さしづめ米の見本市の様相であった。一方、貨物においても同様で、お彼岸用の菊花が、キャベツ、レタス等の日常野菜が、そして国内価格が高騰したおりにネギが大量に輸入されるなど冷夏で大忙しの1年であった。また、最近ではエスニック料理がブームになっている。4年前、独特の匂いと特徴のあるタイ産野菜が何十種類も入った箱、数十箱が輸入された。タデ食う虫も好き好きではあるが、とにかく匂い香りが強い。この検査官泣かせの野菜、今でも順調に輸入が伸びている。

空港は人を映す

植物を輸入するとき植物検査は書類審査だけで済ませることができない。すべて現物検査が必要である。病害虫が発見されれば消毒や廃棄が必要であるし、輸入禁止植物は病害虫が付着しているかどうかではなく、植物そのものを輸入することができないことになっている。

「大変残念ですが何々の国からは何々の理由で、この果物は輸入禁止となりますので持ち込めません。こちらで廃棄させていただきます。」と説明すると、三通りの反応が返ってくる。①「仕方がないですね」と、すぐに納得してくれる人。②「どうしてですか」と、改めて説明を求めてから「年老いた母に食べさせたい。親が病気でこれを欲しがっている。一個でもいいから欲しい」等と情に訴え食い下がる人。③説明の途中で突如として凄味をきかす人。なかには「人のものを取り上げるとはとんでもない、ナイフをかしてくれ。」というので、ナイフを手渡すと30数個、15kgほどの青くて硬いマンゴーを30分程かけて一個一個切刻んだ人もいた。

とにかく、人様の財産にかかわる仕事ゆえ、人それぞれ思いは異なり冷静に対応するのみである。

おわりに

昨年、成田空港に持ち込まれた輸入禁止植物から、廃棄前の害虫寄生調査を実施した結果、ミカンコミバエを例にとると2,400頭余りの同虫寄生が記録された。

わが国の奄美・沖縄などに発生していたミカンコミバエ、ウリミバエは莫大な労力と経費そして年月をかけて撲滅されたが、再び侵入・発生することがあっては大変である。植物防疫所では常に病害虫の侵入警戒調査を実施しているが、私たちは植物に被害をもたらす海外からの病害虫の侵入を未然に防いで日本の農業と緑を守るため、検査及び輸入禁止品の取締りに日夜奮闘している。今後とも植物検疫についてご理解とご協力をお願いする次第である。

(横浜植物防疫所成田支所 佐藤康昭)